

『風に紅葉』注解（二）

一四 男主人公と梅壺女御との歌の贈答

よきほどにて出で給ふやうなれど、例の忍びの御通ひはありけんかし。
上は、女御の御気色も語りきこえ給ひつつ、「かざしの花」のことも聞こえ給ふに、「御みづからにはあらじ」など直し給へる御気色、いと心恥づかし。御面影もあながちならず、ことのやうも人にこそよれ、と思せど、「かざしの花」もさすがにて、

⑪春ごとにかざしの花は匂へどもうつる心は色や変はらむ
と書きて、伝へさせきこえ給へば、心も空にていまだ寝給はざりけるに、よろしう待ち見給はんや。

⑫「年を経て心の色は染めませど色に出でねばかひなかりけり
繁さまされど」などやありけん。

【語釈】

*例の忍びの御通ひ―北の方との秘めた逢瀬。 *上―北の方。 *女御―梅壺女御。 *かざしの花―巻一・六節の①の歌。 *御みづから―梅壺御自身。 *直し―とりなし。 *御面影もあながちならず―梅壺の御面影も

大倉 比呂志

むやみに恋しいと思い出されるわけでもなく。 *ことのやうも人にこそよれ―隠れた関係も相手次第だ。 *⑫「年を経て」の歌―「人知れぬ思ひは深く染むれども色に出でねばかひなかりけり」人知られずにあの人に深く心を寄せてはいるけれども、あの人をそれわかってくれなければ無駄なことだ」（続千載集・恋一・一〇五〇・前大納言兼宗）に拠る。 *繁さまされど―「我が恋は深山隠れの草なれや繁さまされど知る人のなき」私の恋は山奥の人目にはつかない草なのだろうか、草が密生するようにあの人を恋慕する気持ちはますます激しくなるけれども、それを知ってくれる人がいないのだ」（古今集・恋二・五六〇・小野美材）に拠る。

【訳文】

男君は適当な時間でお帰りになったようだが、いつものように北の方との秘めた逢瀬はあったのだろうよ。北の方は梅壺女御の男君に対する気持ちもお話し申し上げなすり続け、「かざしの花」のことも申し上げなするが、「梅壺御自身でなさったことではないでしょう」などととりなしなする御様子は、大そうすばらしい。梅壺の御面影も無性に恋しいわけでもなく、隠れた関係も相手次第だ、とお思いになるが、「かざしの花」もやは

りうち捨てておくことはできず、

⑪春ごとにかざしの花は美しく咲くけれども、私に心ひかれるというあなたの心は変わるかもしれません。

と書いて、伝え申し上げなされると、梅壺はうわの空でまだお休みではなかったたので、いい加減に御覧になるはずもない。

⑫「年を経てあなたを思う気持ちは深くなっていくけれども、心の中で秘めているだけではないが、いいことですよ。」

あなたへの気持ちは高ぶっていくけれども」などと男君に書いたのだろうか。

一五 宣耀殿女御、皇子出産

十日余りのほどにぞ、春宮の女御、いと平らかにて男皇子みこにて生まれ給へる。いつしか行啓あるを、待ちつけたてまつり給ふ殿の内の儀式、言ふもおろかなり。若宮わきみを殿抱ききこえ給ひて、さし寄せきこえ給へれば、異事ことなくまもりきこえさせ給ひて、ほほ笑ませ給ふものから、御涙の浮きぬるを、大將は御佩刀みはかし持ちて候ひ給ふが、老い人のやうに、とをかしく見きこえ給ふ。女御の御有様言へばえなり。心苦しきまさりて、立ち離れがたき御心地なれど、今は過ぐる日数ひかずを数へつつぞ帰らせ給ひにける。

【語釈】

*十日余りのほどにぞ―三月十日過ぎの頃に。 *若宮を殿抱ききこえ給ひて、さし寄せきこえ給へれば―『紫式部日記』寛弘五年（一〇〇八）十月十六日条に九月十一日に誕生した敦成親王（一条天皇第二皇子。後の後一条天皇）への一条天皇の土御門邸行幸の記事があり、「殿（道長）、若宮抱

きたてまつり給ひて、御前に率てたてまつり給ふ。主上みづかみ抱きうつしたてまつらせ給ふほど、いささか泣かせ給へる御声いとわかし」と語られている。 *御佩刀―皇子誕生が帝に伝奏されると、祝いの剣が帝から贈られるのが通例。 *老い人のやうに―春宮が老人のように顔をくしゃくしゃにして涙を流している。詳細は巻一・一五節の【考察】の項を参照されたい。 *言へばえなり―口に出して言おうとしても何も言えない。

【訳文】

十日過ぎの頃に、春宮の宣耀殿女御は極めて無事に皇子を出産なさった。早速行啓があるのを、待ち受け申し上げなされる関白家の儀式のすばらしさは、言うまでもない。若宮を関白がお抱き申し上げなされて、春宮の側にさし寄せ申し上げなされると、春宮はひたすら見つめなされて、ほほ笑みなさるものの、涙ぐんでいらっしゃるのを、大將は御佩刀を持って控えていらっしゃるが、春宮はまるで老人のようだ、と滑稽に拝見なさる。宣耀殿の御様子は今更言うまでもない。春宮は心配が増さって、立ち去りがたい御気持ちだが、今は日数が過ぎるのを数えながら還御なさった。

【考察】

宣耀殿女御が皇子を出産し、春宮が急いで関白邸に行啓するわけだが、春宮がその皇子を見つめる件は、

（春宮ハ皇子ヲ）異事なくまもりきこえさせ給ひて、ほほ笑ませ給ふものから、御涙の浮きぬるを、大將は御佩刀持ちて候ひ給ふが、（春宮が）老い人のやうに、とをかしく見きこえ給ふ。

と語られている。傍線部に着目すると、春宮が初対面の皇子に対してほほ笑んだのは、誕生したのが皇子であったために、自分が即位した暁には、その皇子が〈春宮〉の位に就き、将来的には即位する可能性が大きいところから、自分の分身に皇統譜を継承させることができたという安堵感と、春宮にとっては初めての子供であり、母子ともに健康であるため、嬉しさの余り老人のように顔をくしゃくしゃにして涙を流していると理解されよう。辛島Aは「涙もろいのが」老人の特徴であると解している（なお、春宮は登場人物を示しているのに対して、〈春宮〉はその地位を示すものとして、区別して用いた）。

一六 登華殿女御のこと

登華殿とて候^{さくら}給ふも、この太政大臣^{おほきおとど}の御孫^{みまご}なり。権大納言の姫君なるを、なべては麗景殿候^{れいけいでんさぶら}給へば、参り給ふべきならぬを、ものに憚^{はば}らぬ御癖^{おこまり}にて参らせきこえ給へる。叔母女御^{おばめみこ}の御覚えにはまさりたり。

【語釈】

*なべては麗景殿候^{れいけいでんさぶら}給へば、参り給ふべきならぬを——太政大臣の姫君である麗景殿が春宮に参内しているのだから、通常、麗景殿の兄権大納言は娘を春宮に参内させるべきではない。すなわち、叔母と姪との間で春宮をめぐっての寵愛争奪戦が生じるので、好ましくないということ。

【訳文】

登華殿女御として春宮にお仕えなさる方も、この太政大臣の御孫である。権大納言の姫君であるが、普通ならば麗景殿女御がお仕えしていращや

るので、参内なさるべきではないのだが、権大納言は物事に遠慮しない御性分によって、参内させ申し上げなされた。春宮の御寵愛は叔母の麗景殿よりもまさっていた。

一七 男主人公と梅壺女御との密会

さても梅壺^{むめつ}は、御心も空^たに便^{たよ}りをのみ待ち給ふに、花^{はな}の形見恋しきゆかりの色^{いろ}の藤波咲きかかりて、艶^{えん}なる夕べのほど、ほのめき給へり。例^{れい}のうたた寝のいくほどならぬ宵^{よひ}の間^まは、飽かずなかなかれど、「人の思ひこそ」と言ふこともあれば、これゆゑつくづくと御里居のやうも聞こえ、勧め給ふに、「あながちならぬことゆゑ、空恐ろしう」とやすらひ給へど、紛^{まぎ}らはして導ききこえ給へり。女は思し設けるゆゑよし、この心、歌^{うた}の風情^{ふぜい}も、心恥づかしき御気色^{けしき}に、みな忘れ給ひぬ。『かざしの花』の行方^{ゆくへ}たどり着きても、この春さへ暮れはべりなんは、無下^{むげ}に頼み所なう」と聞こえ給ふに、恥づかしう面^{おも}なき心地して、「あやしき人の上にこそさることとは見はべりしか」とて、おれかへりたる御気色ぞ、人の御ほどには似ずおぼえ給ふ。なほ御心^{みこころ}に入る片つ方にだにうたた寝の迷ひなるを、まいて忙^{いそ}しけれど、後の逢瀬^{のち}もまたいつとおぼえ給はぬにぞ、なかなかやすらはれ給ふ。

*⑬有明^{ありあけ}のつれなき影^{かげ}に先立ちてまた夕闇^{ゆふぐら}の心惑^{まど}ひよとむせかへり給ふ御気色も、逆様事^{さかさまこと}なり。

*⑭「有明^{ありあけ}のつれなき影^{かげ}のまばゆさに鶏^{とり}より先に起き別れぬる

げにかばかりも身にとりてはおぼろけならず思ひ知られはべるは、さりとも思し知る方も」などきこえ給ふ御気色も、千々^{ちぢ}の言^{こと}の葉^はを尽くさんよりも奥ゆかしう身にしみて、言ひ知らずおぼえ給ふ。「天^{あま}の門渡^とる月影^{げい}に」

とのみ御名残^{なごり}をながめ明かし給ふに、御消息^{*せうじ}はさすが待たれぬほどにありけるにや。

【語釈】

*花の形見恋しきゆかりの色の藤波咲きかかりて―「花散りて形見恋しき我が宿にゆかりの色の池の藤波」花が散って形見の花が恋しい時に、ゆかりの色である池の紫の藤が咲き始めた」(新勅撰集・春下・二三〇・入道二品道助)に拠る。*ほのめき給へり―男君が太政大臣邸にお立ち寄りになった。*例のうたた寝のいくほどならぬ宵の間は、飽かずなかなかなれど―いつものうたた寝のような宵の間の男君との短い情事は、北の方にとって物足らず、かえって辛い。*「人の思ひこそ」―「深けれど千尋^{ちひ}の海はほど知りぬ人の思ひは棹^{さえ}も及ばず」深いけれども、海の深さはわかる。人の思いは棹ではその深さを測ることができない」(続古今集・雑下・一八四九・壬生忠岑)に拠る。*これゆゑつくづくと御里居のやうも聞こえ、勧め給ふに―北の方は梅壺女御が男君のために物寂しげに里居をしていることを話し、梅壺の意を汲んで、この里居の機会に梅壺に逢うように男君に勧める。*「あながちならぬことゆゑ、空恐ろしう」―男君の発言。無理をしてまでも梅壺に逢いたいというわけではないから、何となく恐ろしい。*紛らはして導ききこえ給へり―北の方は周囲をうまくごまかして、男君を梅壺の部屋に案内した。*この心―梅壺の男君に対する恋情。全集は「伝えたい気持ち」と訳す。*歌の風情―男君に逢ったら伝えようとして梅壺があらかじめ詠んでおいた歌。*『「かざしの花」の行方たどり着きても、この春さへ暮れはべりなんは、無下に頼み所なう」―辛島Aは「せっかくあの「かざしの花」の歌(①)の贈り主に逢えたのに、この

春までも過ぎてしまうのでは、頼みにならないことだ。この花(あなた)に逢うためには、また、来年の春を待たねばならないのだろうか。春にしか咲かない花に相手をよそえた冗談」という。*さること―女の方から男に歌を詠みかけること。*おれかへりたる―辛島Aは「ピント外れな返答であるので、こういう」と注する。*御心に入る片つ方―北の方のこと。*うたた寝の迷ひ―「はかなしや枕定めぬうたた寝にほのかに迷ふ夢の通ひ路」はかないものだ。枕の位置も決めずにうたた寝をしたので、夢の通ひ路では恋人に逢えそうに逢えなかったよ」(千載集・恋一・六七七・式子内親王)に拠る。*忙しけれど―北の方との情事でさえ短いのだから、梅壺との場合は、情事を早く終えて、早急に出て行きたいけれど。*⑬「有明の」の歌―「有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし」夜がしらじらと明けていく有明の頃、あの人が辛く見えた後朝の別れ以来、暁ほど辛いものはないことだ」(古今集・恋三・六三五・壬生忠岑)に拠る。なお、第四句の「また」を辛島Aは「まだ」とする。その場合、「まだ夕闇の心惑ひよ」となり、「まだ」は「今もなお」の意であって、「今もなお夕闇の中で心が迷い乱れ、途方にくれているような感じがする」と解釈される。さらに、辛島Aは「この前後、『いはでしのぶ』巻一、二位中将と帥の宮の姫君との別れ際の場面との相似が見られる」と指摘している。*逆様事―辛島Aは「普通ならとくに帰っている大将が、わざわざ気を遣って長くとどまってくれているのに、そんなことなどお構いなしに、もう帰ってしまうのか、といわんばかりの恨めしげな歌を詠んだのが、「さかさま」だ、というのである」と述べる。*⑭「有明の」の歌―辛島Aは参考歌として、「別れれど類もあらし小夜深き鶏より先の心尽くしは」夜深くてまだ鶏も鳴かないのにお帰りになるとは。あなたと別れて

からの私は、比べものがないほど辛いだろう」(いはでしのぶ・巻一・帥宮の姫君の歌)をあげる。*千々の言の葉を尽くさんよりも―辛島Aは参考として、「千々の言の葉を尽くし、いかにせんと思ひたらん人よりも、類なうなまめかしげなるは」(いはでしのぶ・巻一)をあげる。*「天の門渡る月影に」―「小夜更けて天の門渡る月影に飽かずも君をあひ見つるかな」夜が更けて大空を渡って行く月が名残惜しいように、あの人を月の光のもとで飽きもせずじっと見つめていたことだ」(古今集・恋三・六四八・よみ人知らず)に拠る。*御消息はさすが待たれぬほどにありけるにや―「御消息」は男君から梅壺への後朝の文。その文が梅壺のもとに早い時間帯に届いたのであろうかの意で、梅壺の男君に対する恋慕と比較すると、男君は梅壺をそれほどまでに思っているのではなく、いわば〈性〉の道具としてしか梅壺を見ていないのではないのかという皮肉が盛り込まれているのであり、語り手が梅壺を揶揄しているのではなからうか。

【訳文】

さて梅壺女御は、御心も上の空で逢瀬の機会ばかりを待っていらっしまったが、花が散って、その代わりとなる花の形見が恋しく思われる宿に、ゆかりである藤の花が一面に咲いて、風情のある夕方の頃に、男君が太政大臣邸にお立ち寄りになった。いつものように宵の間の短い情事は、北の方にとっては物足りなくかえって辛いけれども、人の思いは限りなく深いものだと言葉もあるので、梅壺が男君のために物思いで沈んで御里居をなさっていることも申し上げ、梅壺に逢うように男君に勧めなされると、「無理にということではないから、何となく恐ろしくて」とためらいなさるけれども、北の方はまわりをうまくごまかして梅壺の部屋に案内申し上

げなされた。梅壺はあらかじめお考えになっていた情趣を解する教養、男君への恋情や歌の趣も、すばらしい男君の御様子に、すっかりお忘れになってしまった。『かざしの花』の歌の贈り主を尋ね当てても、この春さえ過ぎてしまいましたら、まったく頼みに思えるところはないのですよ」と申し上げなされるので、梅壺は恥ずかしく面目ない気持ちが出て、低い人の身の上にそのようなことは見ましたが」と言って、ぼんやりしたような御様子は、女御という御身分には似つかわしくないように男君は思いになる。やはり男君のお気に入りの方の北の方との間でさえうたた寝のようない短い情事なので、それ以上にこの梅壺との情事を早く終えて出て行きたいけれど、後の逢瀬も今後はいつ実現できるのかがおわかりにならないので、かえってぐずぐずしていらっしまった。

⑬有明月の無情な光に先立ってお帰りになる姿が辛いものの、あなたに早くまた逢いたいと思って心を乱しながら夕闇になるのを待っているのです。

と激しくむせび泣いていらっしまった梅壺の御様子も、逆な言い分である。

⑭「有明月の無情な光のまばゆさのために、鶏の鳴く声より前に起きてあなたと別れてしまうことです。

本当にこれほどまでに我が身にとってあなたのことが格別に身にしてみてもいい知られますのを、いくら何でもわかって下さるでしょう」などと申し上げなされる男君の御様子も、数多くの言葉を重ねるよりも慕わしく身にしてみても、言いようもないほど恋しくお思になる。「天の門渡る月影に」とばかり梅壺は男君の御名残を胸に秘め、しみじみと物思いに耽って夜をお明かしになったが、男君の後朝の文は梅壺のもとに早い時間帯に届いたのであろうか。

【考察】

『恋路ゆかしき大将』では恋路の北の方は前左大臣女であったが、その後「はなやかに色めかしき」継母（恋路の北の方の父親前左大臣の今北の方）は「あなたよりすすみて聞こえかかりたりし人」（巻一）で、継母の方から恋路に積極的に接近したのであり、継母はいわゆる〈女すすみ〉であった。ところで『風に紅葉』において、男君は一品宮と結婚後、太政大臣から梅見の宴に誘われ、男君は太政大臣から北の方所生の娘（小姫君）の世話を依頼された後に、

㊤（男君が北の方ヲ）うち見やりきこえ給へる匂ひ、有様に、魂もやがて消え惑ふばかり、現し心もなくぞ上はおぼえ給ふ。

㊦「御賄ひを宮仕ひ初めにも、それや」と、大臣の上に聞こえ給へば、居ざり寄りて、銚子取りて奉り給へば、大将居直りて、色許りて見ゆる女房を、「こちや。いかが、さることは」とのたまへど、[㊧]（北の方が女房ノ手ヲ）なほ押さへて奉り給ふを、「さらば、また」とて（男君が）受け給ふほどの御気色、[㊨]（北の方ハ）ただ死ぬばかりぞおぼえ給ふ。

とあり、この後男君と北の方とは密会を重ねるわけだが、㊤の直前に小姫君の世話を依頼された男君が恐縮して返答する様子にうっとりとする北の方が傍線部㊦をはじめとして、㊧㊨に表象されているように、男君に魅了されていく北の方の過程が看取されよう。この場面では北の方に対して『恋路ゆかしき大将』の継母に用いられている「すすむ」ということばこそないものの、〈女すすみ〉の状態であると考えられる。その後、北の方の継子に当たる梅壺女御は「（男君が太政大臣邸ニ）渡り給ふよし聞き給ふ

に、心も心ならず（内裏ヨリ）急ぎ出で給ひてけり」とあるごとく、梅壺の男君への並々ならぬ恋慕を見て取った北の方は、男君に里下り中の梅壺との情交を勧めたところ、男君はその申し出を渋るものの、北の方は男君を梅壺のもとに手引きする。情交後に、梅壺の方から先に男君に贈歌するわけだが、それは「有明のつれなき影に先立ちてまた夕闇の心惑ひよ／とむせかへり給ふ御気色も、逆様事なり」と語られている。梅壺の歌は帰って行く男君の姿を見るのが辛いものの、また男君に逢いたいと思って心を乱しながら、夕闇になるのを待っているという内容であり、いわば梅壺の方から男君を口説いているのを、傍線部のように語り手が揶揄的に語っているのである。そこに梅壺の男君への強烈な恋慕が表象されており、「すすむ」というような直接的なことばは用いられてはいないものの、梅壺もまた〈女すすみ〉であることが顕在化しているのだ。

さらに『恋路ゆかしき大将』において、

右の大臣の女御、承香殿と聞こゆるは、大将（恋路）にも忍びたる御仲なりける、それも上（帝）の御みちびきにぞありける（巻一）。

と語られているように、帝の主導のもとで恋路（後に内大臣・左大臣・関白）と承香殿女御との情交が公認されているわけだが、『風に紅葉』では太政大臣の北の方が男君と情交を結びながら、男君を恋慕している継子で里下り中の梅壺女御と男君との情交を取り持っているのである。主導した人物が帝と北の方という差異はあるものの、主導されたのはともに後に内大臣になった人物であり、他者による取り持ち情交の被女性対象者はどちらも女御であったという共通点を有している。この取り持ちという視点に立脚すると、物語文学ではないが、自分のいわば愛人二三条を異母弟「有明の

月」(性助法親王)に取り持った人物として『とはずがたり』における後深草院が想起される。とすれば、『風に紅葉』『恋路ゆかしき大将』『とはずがたり』の三作品の成立の前後関係は不明ではあるものの、三作品の同時代内成立という「ヨコの文学史」を考えていく必要があるのではなからうか。なお、同時代的作品を論じたものに、辻本裕成「同時代の文学の中の『とはずがたり』」(『国語国文』一九八九・1)がある。

一八 承香殿女御のこと

またその頃、承香殿しよきやうでんと聞こゆるは、故式部卿宮の女御ぞかし。御覚えも重き方浅からぬが、女宮ふたごころ二所ものし給ふ。女二宮は斎院にておはします。女三宮は御身に添へきこえ給へり。父親王、才賢さいけんうすぐれ給へりける、また御子もなく、この女御に、世にありがたき文どもも、さながら御倉町みくらまちに取り置きて、奉り給へりけるほどに、帝をはじめたてまつりて、何くれの文、日記にきども、ただこの女御に尋ねきこえさせ給ふことなるに、大将おぼつかなく思ふみす文ありて、いかで、と思すに、蔵人の弁くわうどながしとて、近う仕つかうまつる人の妹、かの女御に宰相の君とて候ふゆゑありけり。「聞こえてんや」とのたまへば、案内するに、さばかりいかなる風のつてもがな、と思しわたる御心地に、「いかがは。何と記して賜たまはれ」とありければ、その書きつけの奥に、「いかかと危あやぶまれはべりしに、左右さうなくかやうに承うけたまはる、嬉うれしう」と聞こえ給へりけり。「文どもはさることにて、異なる秘事、御みづからならでは」とて、唐からめいたる箱の封ふうつきたるを開あけて見給へば、白き薄様に、

⑮書き付くる昔の跡のなかりせば思ふ心は知らせましやは
また、

⑩「いかにせん見るに苦しき君ゆゑに心は身にも添はずなりゆく
*たよりもあらずあさましうこそ」と書かれたる墨つき、筆の流れ、今の世の上手と聞こゆる御手なれば、置きがたう見給ふ。御返りは、紅の薄くれなゐ様の千入*ちしほに色深しききに書いて、上をば白き色紙しきしに立文*たてふみにしてぞ奉り給ふ。

⑪「伝へ聞く流れを汲くむも嬉しきに逢瀬待たるる水荦の跡

⑬身に添はぬ心の果ての行く末はさりとてよそに見てややみなん
*さぞな昔の契ちぎりにてや」とあるを見給ふ御心地、いかがは。下焚*たく煙けの果てをいかにとのみくゆり侘わび給ふに、君も御心にかかりたれど、内裏うちわたりの暮れかかるほどは、道の空もただならずうかがひきこゆれば、忍びてと思はんものの隈くまはあらはなるべし。人の御ためもよしなう、と思しやすらふほどに、「里に出で給へり」と聞こゆる頃、四月うづきの十日余り、山時鳥やまほととぎすの忍ねび音あらはれて、艶えんなる夕暮れのほど、一条わたりの古宮の御跡へおはしたり。

【語釈】

*御子もなく―他に男の子もなく。 *おぼつかなく―辛島Aは「漢籍の内容が「おぼつかない」のではなく、見ることでできないのが、であろう」と述べる。 *いかで―辛島Aは「下に「尋ねきこえん」などを補い読む」とする。 *案内するに―蔵人弁が宰相の君を通して、承香殿女御の意向をうかがったところ。 *御心地―誰の「御心地」か。男君(辛島A)と承香殿(全集)の二通りの考え方がある。 *いかがは―お引き受け致します。 *左右なく―ためらうことなく。 *心は身にも添はずなりゆく―辛島Aは参考歌として、「吉野山梢の花を見し日より心は身にも添はずなりにき」吉野山の花を見たその日から、心が体から離れるように花

のことが気になって落ち着かないことだ」(山家集・六六)、「帰れども人の情けに慕はれて心は身にも添はずなりぬる」風邪をひいてこの山寺に帰って来たが、人の情けにほだされて誘われて出て行きそう。心が体から離れていくのが目に見えるようだ」(同・九二八)をあげる。*たよりにもあらず―「たよりにもあらず思ひのあやしきは心を人につくるなりけり」私は自分の気持ちをあなたに送り届ける使いではないけれども、不思議なことに、私はあなたへの思いを届けてしまったことだ」(古今集・恋一・四八〇・在原元方。後撰集〈恋二・六八七〉では紀貫之と記されている)に拠る。*千入―何度も布を染めること。*立文―辛島Aは「光源氏が朝顔齋院に文を贈った際、「紫の文、立文すくよかに」(源氏物語・少女)したのが、懸想文と思われなかったための用意であったのと似ているが、ここはさらに、相手が学者ばりの女であることを念頭においてのしわざであろう」と述べる。*さぞな昔の契りにてや―「これもみなさぞな昔の契りぞと思ふものからあさましきかな」あなたとこのような契りを結ぶことになったのも、前世からの因縁なのだと思うはするものの、驚きあきれることだ」(千載集・恋四・八四一・和泉式部)に拠る。*いかかは―下に「嬉しからざらん」が省略されているか。*下焚く煙―「忘れずよまた忘れずよ瓦屋の下焚く煙したむせびつつ」あなたのことは忘れない、絶対に忘れない。瓦を焼く小屋の下で焚く煙にむせるように、私はむせび泣きをしながら」(後拾遺集・恋二・七〇七・藤原実方)、「我が心かはらむものか瓦屋の下焚く煙わきかへりつつ」私の心は変わることはない。瓦を焼くかまどの下で焚いている煙が激しく立ち昇るように」(同・恋四・八一八・藤原長能)に拠る。*道の空―承香殿の部屋までの道中。

【訳文】

またその頃、承香殿として世に知られる方は、故式部卿宮の娘の女御であつた。御寵愛も並々ではなく深く、女宮が二人いらつしやる。女二宮は齋院でいらつしやる。女三宮は御手元に置き申し上げなさっている。父親王は学才がすぐれていらつしやつた。女宮たちの他には男の御子もないので、この女御に非常に珍しい多くの漢籍を残らず御倉町にしまつておいて、それを差し上げなかつたから、帝をはじめとして、様々の漢籍、日記などに関して、ただこの女御にお尋ね申し上げなさるので、大将は見たいとお思ひになる漢籍があつて、何とかしてそれを見たいとお思ひになり、蔵人の弁なにがしといつて、男君に近侍する人の妹は、あの女御に宰相の君といつてお仕えしている縁があつた。男君が蔵人の弁に「申し上げてくれないか」とおっしゃるので、宰相の君を通して承香殿に申し入れると、あれほどのようになすかな縁でもあればよいのに、と思ひ続けていらつしやつた承香殿の御気持ちとして、「お引き受け致します。何々の本と書いてお寄越し下さい」とあつたので、男君は書名を記した最後に、「どうなるのかと心配しておりましたが、このように御快諾いただき、嬉しい限りです」と申し上げなかつた。「漢籍については言うまでもないことです。特別の秘事は、あなた御自身でなければできません」と言つて、唐風の箱で封がしてあるのを男君が開けて御覧になると、白い薄様に、
⑮あなたが書き記した漢籍がなかつたならば、私のあなたへの思いをお知らせすることはできなかったでしょう。
また、

⑯「どうしたらいいのでしょうか。あなたの御手紙を見るだけでも辛いのです。私の心は身から離れてあなたのもとに飛んで行ってしまいそ

うです。

私は自分の気持ちをあなたに送り届ける使者でもないのに、書物にかつけてあなたへの思いを伝えるのはふさわしいことではありません。こんな思いを申し上げることは、我ながらあきれてしまうことですが」と書かれた墨のつき具合や筆の流れは、当代の達人と評判の御筆跡なので、男君は下に置きがたく御覧になる。御返事は紅の薄様で、千入に染めた色の濃いものに書いて、上包みは白い色紙で立文にして差し上げなさる。

⑰「伝え聞く代々の学問の流れを学ぶのは嬉しいうえに、あなたの御手紙に心ひかれて逢瀬が待たれるのです。

⑱心が身から離れて行くというあなたの心が最後に行き着くところは、いくら何でもほかの人のもとだと見て終わるのでしょうか。いや、私のもとにおさまるでしょう。

これもさだめし前世の縁によるのでしょう」と書いてあるのを御覧になる承香殿の御気持ちは、どうして嬉しくないことがあるのか。承香殿は下焚く煙のように密かな恋の行く末がどうなるのかと思って、心がふさいで当惑していらっしやるので、男君も気にかかっていらっしやるものの、内裏あたりの暮れかかる時は、承香殿の部屋までの道中も女房たちが気にかけてうかがっているの、忍んでと思っている目立たない場所でも丸見えだろう。承香殿の御ためにも良くないと、ちゅうちょなさっているうちに、「承香殿が里下りをなさった」ということが耳に入った頃、四月十日過ぎに、山時鳥の忍び音も目立つようになって、風情のある夕暮時に、一条あたりにある古宮邸へお出かけになった。

【考察】

『恋路ゆかしき大将』において、戸無瀬入道と梅津尼君との間に生まれた梅津妹君（後に藤壺女御。冒頭で語られている戸無瀬入道が盗み出した藤壺女御とは明らかに別人だが、混乱を避けるために梅津妹君と称する）の漢字の才能に関して、「男恥づかしきまでいかめしき御才学、唐の文の深きことどもいかでたどり知り給ふらん」と恋路の視点からとらえられ、さらに、「殿（恋路）はなほこの学問のついで（梅津妹君トノ）御あひしらひ思ひさましがたく思されて、しばしば夜更かし給ふを」と語られている。梅津女君は「いまし（漢字ノ）底を究め給へりけり」と語られ、また母梅津尼君の祖父である某博士は「世に聞こえたりけるが、男子も持たで、ただ一人ありける女によろづを授けて、故大臣に候はせけるを、御覧じ放たざりける腹になん、この二人（私云、斎宮女別当と梅津尼君）は出でき給へり」（以上、巻五）とあり、梅津女君と梅津妹君の二人の異父姉妹は漢学者の血筋を継承していると考えられる。また、『風に紅葉』の承香殿女御の父故式部卿宮も「才賢うすぐれ給へりける、……この女御に、世にありがたき文どもも、さながら御倉町に取り置きて、奉り給へりけるほどに」と語られているように、漢学者の系統か、もしくは漢学に造詣が深いと考えられる。このように承香殿も父親から多くの漢籍を譲られて所有しているために、帝は「何くれの文、日記ども、ただこの女御に尋ねきこえさせ給ふ」のである。以上のように、梅津姉妹と承香殿とが漢籍に深い知識を持っていることがうかがわれ、両作品の類似性を見るのである。これに関しては既に辛島正雄（『いはでしのぶ』の影響作——『恋路ゆかしき大将』と『風に紅葉』と）『中世王朝物語史論』下巻に所収 笠間書院 二〇〇一・9。初出、一九八六・3）によって指摘されている。

さらに、承香殿の手元には故父宮から譲られた漢籍が多くあるので、男君は縁故を頼って、見せてほしい旨を申し入れたところ、承香殿から快諾を得ると同時に、

「文どもはさることにて、異なる秘事、御みづからならでは」とて、唐めいたる箱の封つきたるを（男君が）開けて見給へば、白き薄様に、

⑮書き付くる昔の跡のなかりせば思ふ心は知らせまじやはまた、

⑯「いかにせん見るに苦しき君ゆゑに心は身にも添はずなりゆく

たよりにもあらずあさまじうこそ」と書かれたる墨つき、筆の流れ、今の世の上手と聞こゆる御手なれば、……

と承香殿から二首の歌が贈られたことが語られている。傍線部の解釈は、

○あなたの依頼を方便にして、^{ずがる恋}にした訳でもありません。（関）

○使者でもないのに、『文』によせてあなたに心を届けるなんて、あきれたことですね。（全集）

と訳されている。

「たより」には「①手づる。縁故。寄るべ。②ついで。よい機会。③便宜。方便。④具合。加減。⑤消息」（岩波古語辞典・補訂版）の意味があるが、承香殿の⑮の歌からすれば、二人を架橋したのは漢籍であり、それが二人の接近の契機となっている。それゆえ、「たより」は①もしくは②の意味であり、全集の訳文のように解釈すべきで、

◎私は自分の気持ちをあなたに送り届ける使いでもないのに、書物にかこつけてあなたへの思いを伝えるのはふさわしいことはありません。

こんな思いを申し上げることは、我ながらあきれてしまうことですが、となろう。

また、⑯歌の「見る」については、宮中で承香殿が男君を一瞥した可能性はあるとしても、実際にこの時点で男君と直接には対面したことはなく、承香殿から男君にあてた書名記載要請の返事を承香殿は見ていたはずであるから、⑯歌の「見るに苦しき」は「男君からの手紙を見るだけでも切なさを感じて、心も狂いそうに感じられる」と解すべきではなからうか。ちなみにこの箇所は、関では「お逢いしたら一層まともに顔が見られないくらいに」、全集では「あなたを見ると苦しくて」と訳されている。

一九 男主人公と承香殿女御との密会

池、山、木立、もの古りて、石のたたずまひ、水の流れも、優に住みなし給へり。池のあなたの岸より咲きかかれる藤の、軒近き松の梢までたなびきかかれるほど、紫の雲かと見えて、言ひ知らず面白し。中門のほどなど、鏡などのやうに磨ける心地して、悪しくせばすべりぬべくぞあんめる。空薫物けぶたきまでくゆり満ちて、もてつけ艶なる夜の景気なり。寝殿の東面の母屋の御簾下ろして、御櫛出だされたり。色濃き御直衣に、若楓の御衣、白き生絹の単衣、撫子の織物の指貫、匂ひも色もこの世のものならず、光ことに着なし給へる御様、内裏わたりなどにてさし退きて見きこゆるは、なほなのめなりけり。かのことの初め伝へきこえし宰相の君ぞあひしらひきこゆる。月のはなやかにさし出でたれど、暮れかかる空に紛らはして、「あまりもの遠うもはべるかな。伝はるもことごとしう」とて、几帳押しつけ、寄り居給へる御様に、あまり直面なるはつつまじうて、ひき入り給ふ御袖をひかへて、

⑬「忍ぶるか雲のよそなる時鳥音にあらはれて今は聞かばや」

* 思ふてふことも、たがひに晴るけはべらんこそ」と聞こえ給へる御気色など、言ふもなかなかなり。

⑭語らば雲居はよそになりぬとも君があたりに声や尽くさん

言ひ知らず艶なる御気色は、をかしう見きこえ給へど、逢瀬待たれし水茎の跡、人の御ほどの、推し量られしほどの近まさりにはおぼえ給はず。人柄のらうらうじく、優にいみじくおはする人の御ほどによれば、心尽くしなすべき行く末のなかなかなる嘆きをも、浅からず聞こえ給ひながら、暁まではつつましきさまにもてなして、例の宵過ぐるほどにぞ出で給ひぬる。ここにはまして、月頃の下焚く煙は何ならず、時の間だに恋しくかなしく思さるるに、心に入れずは見えじ、と折を過ぐさず訪れなどはし給へど、こなたの御心ざしの十が一だにあらじとぞ見ゆる。いたう隔てじとはほのめき給へど、なほかの梅の立ち枝には御心ひきて、思ひ寄らぬ昼間のほどなども紛れ給ふ。さても「天の門渡る月影」嘆き給ひし人は、心尽くしに嘆き侘び給ひながら、参り給ひにけり。

上はげに御色好みにて、この女御たちをもほどにつけてはすさめずもてなさせ給ふ。まいて承香殿の女御は、一際よしある方には思ひきこえさせ給へれば、御参りをも心もとながらせ給へば、参り給ひぬれど、御心の中ぞせん方なき。

【語釈】

* 咲きかかれる藤の、軒近き松の梢までたなびきかかれるほど―辛島Aは参考歌として、「夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな」藤の花は春から夏にかけて咲くものなのだ。松に咲きかかるものだと

ばかり思っていたのに」(拾遺集・夏・八三・源重之)をあげる。* 紫の雲

かと見えて―辛島Aは参考歌として、「藤の花宮の内には紫の雲かとのみぞあやまたれける」同じ藤の花であっても、雲の上という宮中では、紫の雲と間違えてしまうことだ」(拾遺集・雑春・一〇六八・皇太后宮権大夫国章)、「紫の雲とぞ見ゆる藤の花いかなる宿のしるしなるらん」この藤の花は紫の雲のようにすばらしく見えるが、どのような家のめでたい前兆なのだろうか」(同・雑春・一〇六九・右衛門督公任)をあげる。* 悪しくせばすべりぬべくぞあんめる―辛島Aは「誇張による滑稽」という。* 伝はるもことごとし―女房を介して人づてに言うのはおおげさだ。* 直面―物越しではなく、直接顔を合わせることに。* 雲のよそなる時鳥―辛島Aは「宮中から里に出て来ている承香殿をよそえる」と述べる。* 思ふてふこと―「忍ぶれば苦しきものを人知れず思ふてふこと誰に語らむ」私の気持ちを包み隠しているのは耐え難く辛いものだ。あの人に知られずに思っているということをつたい誰に語ろうか」(古今集・恋一・五一九・よみ人知らず)に拠る。* こそ―辛島Aは「下に「よからめ」などを省略する」という。* 雲居はよそになりぬとも―男君との密会によって、たとえ宮中にいられなくなっても。* 逢瀬待たれし―「し」は「ぬ」とあるが、文意を解することができないので、「し」と傍記しているのを採用。* 人の御ほどによれば―女御という御身分につり合っている。* なかなかなる嘆き―かえって逢わなければよかったという嘆き。* ここ―承香殿女御。* 心に入れずは見えじ―男君は承香殿のことが気に入らないと見られないように。* こなたの御心ざしの十が一だにあらじとぞ見ゆる―男君の承香殿に対する愛情は、承香殿の十分の一さえないと見受けられる。ちなみに、「十が一」とは「可能性、確率がきわめて低いこと。ほと

んどないこと。ほんのわずか」（日本国語大辞典）の意であり、『水鏡』を文治―建久年間（一一八五―一一九九）頃の成立かとする考え（『日本古典文学大事典』明治書院 一九九八・6。海野泰男執筆）によれば、『風に紅葉』の先行例と考えられる。他に時期的に近接するものとして『方丈記』にも用例がある。＊ほのめき給へど―「ほのめく」はちょっと立ち寄ること。＊かの梅の立ち枝―太政大臣北の方のこと。＊「天の門渡る月影」―梅壺女御に関わる状況で、巻一・一七節の注「天の門渡る月影に」を参照されたい。＊参り給ひにけり―承香殿が宮中に。＊よしある方―魅力的な方。承香殿をそうに考える帝の根底には、承香殿の漢学の知識に対する賞讃があるか。というのは、巻一・一八節に「帝をはじめたてまつりて、何くれの文、日記ども、ただこの女御に尋ねきこえさせ給ふことなるに」と語られているからである。＊御心―承香殿の。

【訳文】

池、山、木立は古びていて、庭石の様子や水の流れもすばらしい状態の中で住んでいらっしやる。池の向こう岸から咲きかかっている藤が、軒近くの松の梢までたなびきかかっている様子は、紫の雲のように見えて、言いようもなく趣深い。中門のあたりなどは、鏡などのように磨いた感じがして、悪くすると足がすべってしまいそうである。空薫物の香りがあたり一面に充満し、優美に整えられた夜の気配である。寝殿の東面の母屋の御簾を下ろして、御褥が差し出された。色の濃い御直衣に、若楓の御衣、白い生絹の単衣、撫子の織物の指貫は、香りも色もこの世のものではなく、ことさら光り輝くように着こなしていっしやる男君の御様子からすれば、宮中あたりなどで遠くから拝見する御姿は、やはり普通なのであった。あ

の初めに取り次ぎ申し上げた宰相の君が応待申し上げる。月は美しく現れたが、暮れ始める空の暗さに紛らわして、「余りにも他人行儀なお扱いですね。人を介してお話するのも仰々しいことだから」と几帳を押しつけ、寄り添いなさる御様子に、承香殿はむやみに面と向かうのは気がひけて、奥に入ろうとなさる御袖を男君は押さえて、

⑱「包み隠していっしやるのでしょうか。宮中から退出なさったあなた

の気持ちを今は声に出してはつきりと聞きたいのです。思っているという心の中も、互いに晴らしましょう」と申し上げなさる御様子などは、言いようもないほどである。

⑲あなたと親しく語り合って、たとえ宮中に居られなくなったとしても、あなたの御側でありつたけの声を出していたいものです。

言いようもないほど優美な承香殿の御様子は、魅力的だと拝見なさるけれど、逢瀬が待たれた筆跡や、女御という御身分によって想像されたほどの近まさりにはお思いにならない。人柄が洗練され、優美ですばらしくて女御という御身分につり合っているのに、男君はこれから先、物思いの限りを尽くすに違いなく、逢ったがためにかえって嘆かねばならないことを、浅からず申し上げなさりつつ、暁までは遠慮されるといった風に振る舞って、いつものように宵を過ぎる頃にお帰りになった。承香殿の方では、ましてここ数か月心底で恋の炎を燃やし続けてきた辛さはとるに足りないことで、少しの間でさえ男君のことを恋しく切ないとお思いなので、男君は承香殿のことが気に入らないとは見られないように、と機会を逃さずに訪れなどはなさるものの、承香殿の愛情から比べると十分の一さえもないように見える。男君はひどく間をあけまいと少しはお立ち寄りになるけれども、やはりあの「梅の立ち枝」である太政大臣の北の方には御心がひかれ

て、思いも寄らない昼間の時などにもこっそりお出でになる。ところで、「天の門渡る月影」とお嘆きになっていた梅壺女御は、物思いに嘆き悩みなさりながら、宮中にお戻りになった。

帝は本当に御色好みで、この女御たちをも身分に応じて嫌うこともなくお扱いになる。まして承香殿女御は、魅力的な人とお思い申し上げなされてお、御参内を待ち遠しくしていらっしゃるので、参内はなさったが、御心中では男君のことを思っでどうしようもない御気持ちである。

【考察】

男君は里下がりをしている承香殿女御と彼女の実家で密会する。男君は⑬「忍ぶるか雲のよそなる時鳥音にあらはれて今は聞かばや」の歌を承香殿に贈るわけだが、傍線部は男君が宮中から退出した承香殿の気持ちをほつきりと聞きたいという意であり、「時鳥」は承香殿を比喻している。ちなみに、『和泉式部日記』冒頭部で帥宮敦道親王が「女」（和泉式部か）に橘の花を贈った直後の件は、

（女ハ）ことばにて聞こえさせむもかたはらいたくて、何かは、（帥宮ハ）あだあだしくもまだ聞こえ給はぬを、はかなきことをもと思ひて、

薫る香によそふるよりは時鳥聞かばや同じ声やしたると（橘の香りに亡き兄宮をかこつたりなさるより、あなたの御声を直接お聞きしたい。兄宮と同じ御声かどうか）

と語られているわけだが、「時鳥」は帥宮を比喻し、傍線部はあなたの声を直接聞きたいのだ、亡くなった兄宮（為尊親王）と同じ声であるのかどうかという意味であり、ともに「時鳥」には詠歌の対象者たる相手が比喻

されていて、相手の気持ち（声）が聞きたいと希求しているのであり、歌の構造が極めて類似しているのと同時に、恋の初期段階の歌である点から判断すると、『風に紅葉』のこの箇所は『和泉式部日記』冒頭部分から何らかの影響を蒙っていると考えられるのではなからうか。

二〇 男主人公の一品宮に対する愛情

大將はとかく珍しき限々くまぐまにつけて、かつ見る人の御さまにまさるはなく、契り深くあはれにのみ思ひきこえ給へれば、何事もうちとけ語らひきこえ給ふにも、言ふかひあり、をかしかりぬべき節ふしも思し入るべきことはあさはかならねど、御身のほどのいつかしさをばうち置きて、ただこの御心に限りなく従はん、と思したるも、いかがあはれならざらむ。待たれぬほどに出で来給へりし姫君の、今より限りなく生おひ出で給はんままにいみじかるべき御さまをかつ見るからにも、なほうち置かずもて扱ひきこえ給へる、いみじきことわりなり。

【語釈】

* 珍しき限々―すばらしい女性たち。 * かつ見る人―「陸奥の安積あさかの沼の花かつみかつ見る人に恋ひやたらむ」陸奥国の安積の沼に花かつみが美しく咲くようになった。そのような美しい人に私はちょっと逢うのだが、その彼女をいつまでも恋い続けるのだらうか」（古今集・恋四・六七七・よみ人知らず）に拠る。「かつ見る人」とは一品宮のこと。 * 御身のほどのいつかしさ―皇女という立派な御身分。 * この御心―男君の御心。 * いみじかるべき御さま―姫君の将来におけるすばらしい御様子。具体的には入内して中宮にまで昇りつめること。 * うち置かずもて扱ひきこえ給へ

る―男君が一品宮を大切に扱う（辛島A・全集）とも、男君が姫君を大切に扱う（関）とも、両方の解釈が可能である。

【訳文】

大将はあれやこれやとすばらしい女性たちと関わるにつけても、一品宮の御様子にまさる人はなく、宿縁が深く、ただいとお思い申し上げなさるので、何事も隔てなくお話し申し上げなさるが、一品宮は話しいがあり、趣のある折に深くお思いになることは思慮深い御様子であるけれども、御自身の高貴な御身分はさし置いて、ただ男君の御心にすべて従おうとお思いなのも、どうしていとしくないことがあるうか。間もなくお生まれになった姫君が、今からこの上なくすばらしくおなりになるのに違いない御様子をまた見るにつけても、やはり男君は姫君を見捨てずにお世話申し上げなさるのも、まことにとてもなことであった。

二一 男主人公の憧れの的 ―叔母、弘徽殿中宮

* この御さまをも中宮の常にも見きこえ給はず、うとうとしきを、大将は、などかくはおはしますぞ。心つけ顔に上の思し疑ふなるぞをかしき。思ひ寄るほどのことかは。七、八ばかりにて童殿上して参り給へりける折、つくづくと目離れなくまもりきこえ給へりけるを、上の御覧じて、「心のつかんまに、誰がためもよしなし」とて、御入り立ちは放たれ給ひにけり。その後は、御衣の裾よりほかに見きこえ給はず。「幼くては、容貌わろき女の側をば通らじとさへする曲者にて、ありし人の御ほどのめでたかりしとはほのかにおぼゆれど、いかなりし御面影とだにおぼえきこえぬこと。御方々の参り上り給へる夜も、半ばにはこなたへなるとかや人の言ふ

なるは、まことか。春宮の宣耀殿の御仲はまたけしからぬほどなり。御容貌はいづれかすぐれたる」と、いづ方もおぼつかならず参る、この宮の按察使の乳母に問ひ給へば、笑ひて、「上は、なべて珍しき人などをばときめかせ給ひて、その上限りなき御気色こそ映え映えしうはべるに、春宮の御仲らひは念なくおはします。よろづはさることにて、后宮の若うおはしますことは、この御前、春宮などの御母后とは、すべて思ひ寄らぬことになん」と聞こゆれば、女御をだにかかる類のまた世にあらば、と見きこゆる度には案ぜらるるを、げに我が心の中は知りがたし、とは思ふものから、いかなれば、とゆかしからずしもなし。御年はまた、承香殿はなほ御兄なりかし、と思し出づる例もありけり。

【語釈】

* この御さま―娘の一品宮の御様子。 * 心つけ顔に上の思し疑ふなるぞ―男君が中宮に執心しているように帝がお疑いになること。 * 童殿上―貴族の子弟が、内裏の作法を見習うために、昇殿を許されて殿上に奉仕すること。 * つくづくと―男君が中宮を。 * 心のつかんまに―男君が成長して男女の情を理解するようになると。 * 曲者―変わり者。 * ありし人―中宮。 * 半ばにはこなたへなるとかや―夜半には帝が中宮のもとにお渡りになるとかの話。 * けしからぬほどなり―異常なほどの寵愛である。 * 御容貌はいづれかすぐれたる―御容貌に関して、中宮と宣耀殿女御のどちらが美しいのか。 * 念なく―春宮は宣耀殿一辺倒で、面白味がなく残念だ。 * この御前―一品宮。 * 女御をだにかかる類のまた世にあらば、と見きこゆる度には案ぜらるるを、げに我が心の中は知りがたし―せめて宣耀殿ほどの美人がいたならばと、宣耀殿に会う度に思われるの

に。そうなれば、私の心は宣耀殿のような美人に心が傾き、中宮一辺倒と
いうことは起こるはずはない。私は一品宮のことを思いながらも、中宮の
ことを気にかけているのだから、我ながらよくわからないという意か。辛
島Aは「あらば」の下に「いかにせまし」などを補い読む」とする。さ
らに、「案ぜらるるを」に関して、辛島Aは「その宣耀殿以上の美人だと
いう中宮のような人がいたら、どうだろう」と解する。また「げに我が心
の中は知りがたし」に関して、辛島Aは「自分には愛する一品の宮がいる
のに、また別の女のことを考えると」と解する。*いかなれば―辛島
Aは「どうしてそのように中宮は若く美しいのだろう、の意か」とする。
*御年はまた、承香殿はなほ御兄なりかし―辛島Aは「光源氏が藤壺より年
長の六条御息所と恋愛関係にあったことなどが意識されていたよう」という。

【訳文】

この一品宮の御様子をも中宮はいつも拝見なさらず、疎遠なのを、大将
はどうしてこのようであらうのだろう。自分と中宮との関係を帝が
疑っていらっしゃるのは滑稽だ。考え及ぶような間柄だろうか。男君が七
八歳位で童殿上して参内なさった折、男君が目を見離すことなく中宮をじっ
とお見つめ申し上げたのを、帝が御覧になって、「男君が成長して男女の
情を解するようになると、誰にとっても良くない」とおっしゃって、御出
入りを禁止なさった。その後、男君は中宮の御衣の裾以外は拝見なさって
いない。「私は幼い頃は、容貌の良くない女の側を通るまいとするような
変わり者で、かつて見た中宮はすばらかったということはかすかに覚えて
いるけれども、どのような御面影であったかさ覚え申し上げていない
ことだ。お后たちが清涼殿の夜の大殿に参上していらっしゃる夜でも、夜

半には帝が中宮のもとにお渡りになるとか人が申し立てるようだが、そ
れは本当か。春宮と宣耀殿女御との御仲の睦まじさはまた常軌を逸してい
らっしゃる。中宮と宣耀殿とでは御容貌はどちらがまさっているのか」と
どちらへも親しくうかがっている一品宮付きの按察使の乳母にお尋ねにな
ると、笑って、「帝は総じてすばらしい女性を寵愛なさって、さらに中宮
に対するこの上ない御寵愛があるからこそ見映えがしますが、春宮と宣耀
殿との御仲は余りにも睦まじ過ぎて残念です。中宮がすべての面ですばら
しいのは当然ですが、中宮が若くていらっしゃることは、一品宮や春宮な
どの御母后であるとはまったく思いも寄らないことです」と申し上げると、
せめて宣耀殿ほどの美人がこの世にいらっしゃったら、と拝見するたびに
思われるのに、そうであるならば、私は宣耀殿のような美人に心が傾いて、
中宮一辺倒ということにはなり得ないのに。本当に我が心の中ときたら、
自分でもよくわからないとは思ふものの、どういうわけでこれほどまでに
中宮のことが気にかかるのか、と中宮を見てみたいと思う気持ちもある。
御年はまた、承香殿女御は中宮よりも年上であつたのだ、と思い出される
例もあつたのだ。

二二 宣耀殿女御、再度懷妊後、重態

宣耀殿、冬頃よりまた同じさまなる御心地にて、年も返りぬる夏頃より、
いかなるにか御心地を苦しうせさせ給ひて、日に添へて弱らせ給へば、誰
も思ひ嘆きて、七月ついたち頃よりは、出だしたてまつらせ給ひて、御祈
りひまもなし。春宮はまいて、出でさせ給ひし日より、同じさまに臥し沈
ませ給へれば、上、后宮も思ひ嘆くこと限りなし。

【語釈】

* 同じさま——二度目の懷妊。 * 年も返りぬる——男君、十七歳。 * 出だしたてまつらせ——宣耀殿女御を実家に退出させる。

【訳文】

宣耀殿女御は、冬頃からまた同じように懷妊の御様子で、翌年の夏頃から、どうしたのか御気分が悪くおなりになって、日毎に弱りなさるので、誰もが思い嘆かれて、七月上旬頃からは、実家に退出させ申し上げなされて、御祈りは絶え間がない。春宮はそれ以上に、宣耀殿が退出なさった日から、同じように嘆き沈んでいらっしやるので、帝と中宮も思い嘆きなさることはこの上ない。

二三 男主人公、聖を招請するために、難波へ下向

唐土より渡りたる聖の、相を賢くして験あるが、このほど、難波の海の方、天王寺、住吉などに行ひ歩くよし、大將に聞こゆる人あるに、さうでだにさやうの方進む御心はいと嬉しく思ひ、「かかることをなん承る。『並々ならん御使ひなどには参りはべらでや』と申しはべり。我行きて尋ねはべらん」と、大臣に申し給ふに、都離れたらん御歩きをおぼつかなかりぬべく、しぶしぶに思したれど、御供の人、これかれなど定め給ふ。御傳の民部卿、その子供、さらでもむつまじき殿上人二、三人にて、八月二十日余りの有明の月とともに、御舟に召す。鳥羽田の面、淀の渡り、長柄の橋の古き跡、今津、柱本はどなく過ぎて、渡辺や大江の岸に着きぬれば、雲居に見ゆる生駒山など、ならはず珍しう思ふ。いまだ明かきほかに、難波の寺に参り着き給へり。東門中心の思ひなしといひ、心の塵をすす

ぐらん亀井の水をむすびあげても、ものごとに御心澄みつつ、かの聖尋ねさせ給へば、住吉に侍るよし申せば、次の日ぞ御馬にて渡り給ふ。薄、刈萱など秋の草どもも、都よりはほのかにあはれげにて、道すがら心細し。阿倍野の王子などいふ渡りすぎて参り着き給へば、朱の玉垣神さびて、さこそは現兆なるため、とまことに信も起こりぬべし。海面に形のごくなる庵、薄、刈萱などをかことに結びてぞありける。

【語釈】

* 相を賢くして——「相」は人相見のことであり、観相法のことである。
* さやうの方進む御心——男君が仏道の方面に興味を示していること。
* 『並々ならん御使ひなどには参りはべらでや』——辛島Aは『いはでしのぶ』巻二に見える、一品の宮難産の折、葛城の聖招請に「なべての御使はかなはじ」と判断した白河院が大將（もと二位中將）を迎えに立てる設定が、影を落としていよう」と指摘している。ちなみに、この時の男君の官職も大將であり、もとは二位中將であった。 * 大臣——男君の父、関白左大臣。 * 御傳——男君の養育係。 * 鳥羽田の面、淀の渡り、長柄の橋——「鳥羽田」「淀」は山城国。「長柄」は摂津国。 * 今津、柱本——ともに摂津国。 * 渡辺や大江の岸——「渡辺や大江の岸に宿りして雲居に見ゆる生駒山かな」渡辺や大江の岸に泊って眺めると、雲の彼方に生駒山が見えることとだ」（後拾遺集・羈旅・五二三・良暹法師）に拠る。「渡辺」「大江」は摂津国。「生駒山」は河内国。 * 難波の寺——天王寺。 * 東門中心——底本「とう行中心」。「行」は「門」の誤写か。辛島Aは「天王寺の西門は極楽の東門に当たると信じられていた」という。なお、植木朝子「四天王寺西門信仰と今様——『梁塵秘抄』一七六番歌をめぐって——」（『日本歌謡研究』四十

七号（二〇七・12）などがある。＊心の塵をすすぐらん亀井の水をむすびあげて―「濁りなき亀井の水をむすびあげて心の塵をすすぎつるかな」濁りのない亀井の水を手ですくいあげて、心のけがれを洗い清めたことだ」（新古今集・釈教・一九二六・上東門院彰子）に拠る。＊王子―熊野神社の末社。＊朱の玉垣―「住吉の松の下枝しづえに神さびて緑に見ゆる朱の玉垣」住吉の松の下枝のために、御社の朱の玉垣も神々しく緑に見えることだ」（後拾遺集・雑六・一一七五・蓮仲法師）に拠る。＊現兆―神仏が靈験を示すこと。全集は「厳重げんぢやう」（厳かでいかめしいこと）とする。＊信―信心。＊かこと―申し訳程度に。

【訳文】

唐土から渡航して来た聖で、観相にすぐれて効験のある人が、近頃、難波の海の方、天王寺や住吉などを行脚する由を、大将に申し上げた人がいるので、そうでなくてさえ仏道の方面に興味を示している御心には、大そう嬉しくお思いになって、「このようなことをうかがいました。『普通の御使いなどでは参上しないのでは』と人が申します。私が聖を尋ねて行きましょう」と、父関白に申し上げなされると、父親は都を離れてのお出かけが心配で、気が進まないとお思いであったが、御供の人を誰彼などとお決めになる。御世話係の民部卿やその子供たち、日頃から親しい殿上人二、三人を連れて、八月二十日過ぎの有明の月とともに、舟にお乗りになる。鳥羽田の面、淀の渡し場、長柄の橋の古い跡、今津、柱本もまもなく過ぎて、渡辺や大江の岸に到着したところ、はるか遠くに見える生駒山など、見慣れず珍しくお思いになる。まだ明かるいうちに、難波の寺に到着なさった。東門中心に思いをかけていることといい、心の塵を洗い清めるとかいいう亀

井の水を手ですくいあげても、万事に御心が澄み続けて、あの聖を尋ねさせなされると、住吉にいる由を申すので、翌日御馬でお出かけになる。薄、刈萱などの秋の草なども、都よりはちょっと寂しげであって、道中が心細い。阿倍野の王子などというあたりを過ぎて到着なされると、朱の玉垣もおごそかで、さぞかし神が靈験をお示しなのだろう、と本当に信心も起こるに違いない。海辺に形ばかりの庵を薄や刈萱などをほんのわずかに編んで作ってあった。

【考察】

男君は妹宣耀殿女御が第二子を懐妊したものの、重態に陥ったために、唐帰りの靈験あらたかな聖を招請する目的で難波に下向した件は、【語釈】で記した新古今集所収歌のほかに、『栄花物語』卷三十一（殿上の花見）で語られている個所が参考となる。女院彰子は長元四年（一〇三二）九月二十五日に石清水と住吉に立出した後、天王寺に参詣し、亀井の水のものとで「濁りなき」の歌を詠む。さらに、天の河において関白頼通が「君が世は長柄の橋のはじめより神さびにける住吉の松」我が君（彰子）の御寿命は長柄の橋のように永久であり、それは最初の架橋の時から古めかしかった住吉の松が変わらないのと同様である」と詠歌し、また、弁の乳母（越後の弁の乳母。紫式部女）が「橋柱残らざりせば津の国の知らずながらや過ぎはてなまし」橋柱が残っていなかったら、摂津国の長柄の橋だと知らずに通り過ぎてしまっただろう」と詠歌したと記されている。

二四 男主人公と聖との対面

＊うち見たてまつりて、さにもたまらず畏かしこまり惑まどふめり。まづ発はっしん心の始め

など問ひ給へば、「いつを始めに道心など起こしたることも侍らず。筑紫^{つくし}の方に侍りしが、十ばかりより僧の形にまかりなりて、寺になん侍りし。その長老^{*}の入唐^{にたう}しはべりしに具して、渡りはべりしほどに、それも亡^うせはべりにし後^{のち}まで二十年余りかの国に侍りしが、この四、五年ばかり、筑紫に帰りてはべるなり。親、同胞^{はらから}、親類もみな亡^うせはべりにけり。昔住みし家の跡も姑蘇台^{こそたい}の露だに残らず、波かくる磯にまかりなりはべりにければ、今更^{*}ならぬ世の無常も思ひ知られはべりて、安樂寺^{*}にぞしはし行ひはべりしが、所々の靈仏、靈社拝みたてまつらんとて惑^{まど}ひ歩^{あり}きはべり」と聞こゆ。女御の御悩みのやう語り給ひて、「御有様をしかるべく聞きつけてなん、ならはぬ旅の空にあくがるを、これもしかるべきことと思ひて、誘はれ給ひなんや」とのたまふ御さまの、この世のものとも見え給はぬに、功德^{くんとく}の報^{むく}ひあらはれて、かたじけなければ、「いかでかは。月に入らせ給ひなんに参りはべらん」と申す。よろづのことを問ひ給ふに、暗きことなし。斧^のの柄^えも朽^くちぬべう思ひて向かひ居給へるに、社のそうくわん、幣帛^{ひてぐらさき}捧げたりつるままに、上の衣^{きぬ}ことごとしげに着なして、「無下^{むげ}にあだなる御座^{おまし}所^{ところ}のかたじけなうはべるに、釣殿^{おとし}に御座^{おまし}よそひてはべるに、入らせ給ひて、聖^{ひじり}をもかれへ召すべき」よし申す。さすがに聖^{ひじり}も初夜^{しよや}の行ひに入るべければ、おはしましぬ。

【語釈】

*うち見たてまつり―聖は男君を拝見して。辛島Aは参考として、「まづ、うちまもりたてまつりて、仏などの変じ現れ給へるにやと見おどろかれて、うち泣きつつ」(浜松中納言物語・巻三・中納言を迎えた吉野の聖の反応)をあげる。 *長老―仏教語。学問と徳行(道德にかなった良い行い)とがとも

にすぐれた年長の僧。 *姑蘇台―「強呉滅ビテ 荊棘^{きよく}アリ 姑蘇台ノ露 濃々タリ 暴秦衰ヘテ虎狼ナシ 咸陽宮ノ煙片^{けかり}々タリ」(和漢朗詠集・下・故宮付破宅・五三三・源順)に拠る。 *今更ならぬ世の無常も思ひ知られはべりて―既に出家の身であるから、今更はじまったことではないが、世の無常も思ひ知られまして。 *安樂寺―現在の太宰府天満宮。 *功德の報ひあらはれて―全集はこれから聖の詞とする。 *いかでかは―辛島Aは「下に「さそはれはべらざらん」などを補い読む」とする。 *月に入らせ給ひなんに―臨月にお入りになる頃でしょうから。 *斧の柄も朽ちぬべう―長い時間が経過するのを忘れるたとえ。 *社のそうくわん―不明。全集は「そうくわん」を「総官」とし、神宮の責任者を想定しているか。 *初夜―夜を三分した最初の時間。

【訳文】

聖は男君を拝見するや、こらえきれずに恐縮してとり乱しているようだ。はじめに仏道に入ったことの次第をお尋ねになると、「いつから菩提心を起こしたということもございません。筑紫の方にいましたが、十歳頃から僧形となりまして、寺にいました。その寺の長老が入唐しましたのに従って、渡唐しましたうちに、長老も亡くなりました後まで二十年余りかの国にいました。ここ四、五年ほど筑紫に帰っています。親、兄弟、親類も皆亡くなりました。昔住んでいた家の跡も姑蘇台の露さえも残らず、波洗う磯となっていましたので、今改めて世の無常も思ひ知られまして、安樂寺でしばらく修行していましたが、あちらこちらの寺や神社を参拝しようとして歩き回っています」と申し上げる。男君は宣耀殿女御の御病気の様子をお話しなされて、「あなたの御様子をすばらしいと人づてに聞いて、

慣れない旅の空をさまよっているのを、これもそうなるべき運命だと思
いになって、都にいらして下さいませんか」とおっしゃる御様子で、この
世のものとも見えなさらないので、功德の報いがあらわれて、恐れ多くて、
「どうして参らぬことがあります。臨月にお入りになる頃でしょうか
ら、参上致しましょう」と申し上げる。男君が色々なことをお尋ねになる
が、精通していいところがない。長い時間が経つのを忘れてしまいそう
にお感じになりながら、聖と対面なさっていると、社の〈そうくわん〉が
幣帛を捧げたまふ、上着を仰々しく着て、「ひどく粗末な御座所で恐れ多
うございますから、釣殿に御座席を準備してありますので、そちらへお入
りになって、聖をもそこへお呼びになるのがよろしい」旨を申し上げる。
そうはいうものの、聖も初夜の勤行に入らなければならないので、男君は
釣殿へいらしかった。

（未完）

（おおくら ひろし 本学名誉教授）